琉球大学学術リポジトリ

はしがき：特集「学生による授業評価」によせて

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 渡久山, 章
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42041

はしがき－特集「学生による授業評価」によせて

大学教育センター長　渡久山　章

「いい授業をしたい」、授業を担当している人ならだれもが、望むことでしょう。では「どうしたらいい授業ができるのか？」、かってそれは自己責任の下で、自己点検に依っていた。準備万端で教壇に立った日は気分よく終えることができ、準備不十分で臨んだ日は後味悪く、反省ばかりが残ってしまうというような。しかし、そんな「自己責任授業改善法」とでもいえるような時代は、過ぎたのではないか。

では、新しい時代の授業改善法とはどんなものか？それは広く社会の構成員に対しても、説明責任（アカウンタビリテイー）を果たせるように改善策を考えていくというものではないか。具体的には学生の授業評価を受け、同僚とも討論し、もっと広く大学や社会の構成員とも話し合いながら（情報を公開しながら）、改善策を練るというものになろう。“Plan Do and See”を公開の下で行うということである。

新しい時代の授業改善策に向かって、本学では平成7年度前期から共通教育等に関して、「学生による授業評価」が始まった（旧教養部時代）。平成9年前学期から教養部が解消し、大学教育センターが業務を引き継いだ後も、「学生による授業評価」は続けられているから、満9年、18箇学期も行ってきている。

その間、教養部時代に1回、大学教育センターになってから2回、「学生による授業評価」がまとめられている。

教養部時代のものは、自己点検評価報告書（1996年3月）に収められている。それを読むと、「学生による授業評価」を始めた平成7年前学期は、アンケートを実施した教官が全てを管理・活用し、後学期は一部データ（授業の総合評価項目に対する集計結果）を、自己管理委員会に提出する方式がとられた。自己管理委員会はその出されたデータをまとめた。その結果は、1）実施クラスは313で、実施率は68.8%、約3分の1の教官は行ってない。2）実施率は教養部専任教官が74.2%、他学部教官が51.3%、非常勤講師が70.5%となり、他学部教官（兼担）の低さが指摘された。3）総合評価では、「もう少し」と「よくない」を合わせて5.7%にすぎず、95%近い学生が「普通」以上の評価をしていた。「大変良い」と「良い」の両者を合わせると72.5%になった。4分の3近くの学生から高い評価を得ているといえる。4）科目区分ごとで最も高い評価を得たのは、健康運動系科目で、総合評価の平均が4.31で、最も低かったのは専門基礎科目の3.32であった。5）同一科目群のクラスごとの平均値は記されてないが、データは出されているので計算してみると、健康運動系科目は4.73～3.61（アンケート回答者数が24～152人のクラスについて）に、専門基礎科目は4.00～2.83（アンケート回答者数が20～97人のクラスについて）に分布していた。6）反省点としてマークシート方式の導入があげられている。

2回目のまとめは、旧教養部教育委員会委員長であられた仲地弘善先生（前大学教育センター長）によってなされた。タイトル「平成8年度前学期『授業評価アンケート』の実施状況と総括」にあるように、平成8年度前学期の結果をまとめたものである。それによると、1)「授業の総合評価」の集計結果は、否定回答である「もう少し」と「よくない」を合わせて10.3%、「大変良い」と「良い」を合わせた肯定回答が60.5%になっている。ほぼ90%以上の学生が「普通」以上の評価を与えている。しかし、前の学期と比べると「普通」以上も、「大変良い」と「良い」を合わせた割合も低下している。回答方式（マークシートであるか、ないか）の違い、あるいは他の要因もあるかもしれない。2）集計結果を死

蔵せず、テキスト作成やシラバスを再検討していく指標として、あるいは授業方法の改善に向けて大いに活用しなければならないと、まとめられている。

3回目のまとめ（大学教育センター報、第2号、1999年）は、大学教育センターにおかれた大学教育改善等専門委員会によってなされた。タイトルは「学生による授業評価－4年間の実施結果概要」で、平成7年後学期から平成10年前学期までの6箇学期の結果がまとめられている。その中には、1）質問用紙作成の経緯、2）授業評価実施方法、3）実施状況、4）授業科目別の評価状況、5）自由記述の分析、6）「授業評価」に基づく授業改善のために、などが取り上げられている。中で4）授業科目別の評価状況では、健康運動系科目が6箇学期全てにおいて最も高い評価（4.31～4.05）を得、専門基礎科目が最も低い（3.56～3.32）評価を得ていることがわかる。6）「授業評価」に基づく授業改善のための課題としては、①データの管理・活用の範囲を広げることを全学的に合意を得る、②評価結果のクロス集計、③評価結果の各教官へのフィードバック方法の改善、④「授業評価」そのものの改善などがあげられている。

これらの内、①データの管理・活用の範囲を広げることについては、昨年（平成15年）の全学教育委員会において、「学生による授業評価（共通教育）の全項目を統計処理・分析」と「外部へ公表する」ことが承認された。今回の特集は、この承認に基づき、これまでよりさらに各先生方の授業改善に役立てるように、分析がなされている。しかし、5年前（平成11年）に指摘された、③評価結果の各教官へのフィードバックなど、いくつかの課題は未だ残されたままである。今後これらの課題を解決し、さらに充実した授業が展開されるようにしたい。本学全構成員のご協力をお願いする次第です。